付篇Ⅱ

山口県内出土の紡錘車からみた弥生社会

－角閃石安山岩製紡錘車の分布から－

豆　谷　和　之

はじめに

本論が題材とする遺物は、山口県内の弥生遺跡から出土する紡錘車である。紡錘車とは概説書が述べるように、糸をつむぐ際のはずみ車に用いられた円板のことである[1)]。遺跡から発見される様々な材質による穴の開いた小型の円板は、たいてい紡錘車と呼ばれている。つむぎ棒とセットで遺跡から出土することは稀であるから[2)]、本当にそれとして用いられていたかは確実ではない。穴のあいていない未製品と呼ばれるものを含めると、さらに怪しい。しかし、判定基準といったものはないわけであるから、とりあえずは5㎝を前後とする円板を未製品も含めて集成する。この集成は当時製作・使用されていた紡錘車全てに及ぶものではない。当然ながら腐朽する鉄[3)]・有機質[4)]を材質に用いた紡錘車は欠落し、土製品・石製品のみに限定される。また、手元の資料のみによったため、網羅できなかったものがあることを予め断わっておきたい。

集成の次の一般的な手順として、本来ならば形態分類を行うわけであるが、紡錘車は機能が装飾に優先するためか形態変化は乏しい。時代を弥生に限定するならば、形態のほとんどは円板形で型式学的操作は意味をなさない。山口県内の紡錘車もまた例外ではなく、その形態に特徴があるといったものではない。しかし、その材質に目を向けるならば、山口県内の紡錘車には特徴のある石材を用いたものがある。角閃石安山岩を材質とする一群である。使用されている角閃石安山岩には、長柱状の角閃石の斑晶を多く含むという特徴があり、報告書の写真だけで他の石材と区別することが容易である。この角閃石安山岩製紡錘車と、その他の石材、土製品に分類する。

角閃石安山岩製紡錘車は特徴的な為、他の材質の紡錘車に比べて時間的・空間的な分布を把握することが容易である。山口県内でも東部の周防と呼ばれる地域のみに、時間的にも中期後半から後期後半に限られて分布していることが判明している。比較的座標の固定された角閃石安山岩製紡錘車を軸に、他の材質による紡錘車との時間的・空間的な関わりを検討する。この時、何の変哲もない紡錘車は、周防中期弥生社会における流通機構を、そして、古墳時代への変動を雄弁に語り始めるのである。

1　山口県内の弥生紡錘車

本章では、山口県内の弥生紡錘車の集成を行う。最初に断わったように、穴のあいていない未製品と呼ばれるものも含めた、5㎝を前後とする円板の集成である[5]。截頭円錐形のものは、古墳時代後期に属する可能性が高いので除外される。分類は材質から、石製品と土製品に2大別する。さらに、石製品は角閃石安山岩と、その他の石材に区分する。また、円板形の土製紡錘車には、土器片を転用しているものがあり、佐原氏の分類[6]にしたがい当初より紡錘車として製作されたA種と、土器片転用のB種に区分する。石製品におけるA種とB種は、今のところ山口県内でのB種が見あたらないため、特別には区分を行わない。時期決定に関しては型式学的操作が意味をなさない以上、紡錘車そのものから行うのは不可能なので、同一遺構内の伴出土器をもって一応の帰属時期とする。

次に、集成された紡錘車は水系単位での把握を行う。この方法は、山口県の地形の特性に基づいたものである。山口県の地形は、山塊が海岸部に迫り広大な平野は認められない。また、弥生時代において海岸線はより入り込んでいたとされ、当時の平野面積は現在よりもさらに縮小されたものである。山と海に分断されて点在する小平野や盆地は閉鎖された空間となり、この空間内において周辺の丘陵あるいは台地上には、中小規模集落が立地している。中央の低地部では、周囲の丘陵あるいは台地上から流れ出た小河川が合流し主要河川となるが、その主要河川沿いには拠点的な大規模集落が立地している。この立地状態から、主要河川に沿った大規模集落を核とする閉鎖された空間での地域統合が考えられる。山口県弥生遺跡・遺物の動態を捉えていく上で、主要河川単位での把握は有効な手段と考える[7]。

(1)　角閃石安山岩製紡錘車

角閃石安山岩製紡錘車の分布範囲は河村吉行氏が、「県中央部から東部にかけての中期後半の遺跡で紡錘車の石材は付近に石材分布域をもたない、角閃質安山岩をほとんど例外なく選択的に使用している[8]」と指摘するように、山口県東部いわゆる周防と呼ばれる狭い範囲に限られる。現在のところ、その東限は田布施川流域の明地遺跡（河川でとらえるよりは、古柳井水道の関連を考えるべきか）であり、西限は椹野川流域の吉田遺跡である。

各遺跡における伴出土器が示す年代は、中期後半から後期後半である。唯一、突抜遺跡の11号土壙の伴出土器が前期末であるが、報告書に掲載された土器には中期後半の甕も含まれており注意が必要である。上限を示す確実な資料は、大崎遺跡1号溝の垂下口縁壺出現期の土器に伴出したものであろう。下限は宮原遺跡7号住居跡の後期終末の丸底化しつつある甕などに伴出したものが考えられる。

Tab. 5　県内出土角閃石安山岩製紡錘車一覧表

遺跡名	所在地	番号	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	出土遺構	時期	文献
田布施川流域									
明地遺跡	熊毛郡田布施町大字大波野	1	5.0	0.9	0.6		25号住居跡	後期後半	1
島田川流域									
清水遺跡	玖珂郡玖珂町字清水	2	4.6	0.7	0.7		第2環濠	後期後半	2
		3	3.4	0.6	0.6		3号段状遺構	後期前半	2
天王遺跡	熊毛郡熊毛町大字安田字天王	4	5.2	0.6	0.6				3
		5	5.5	0.9	未製品				3
岡山遺跡	熊毛郡熊毛町大字安田字岡山	6	(5.4)	0.65			環濠	中期後半	4
		7	4.3	0.65	0.8	13.1	表採		4
		8	(5.4)	0.7	(0.6)		2号住居跡	後期前半	4
追迫遺跡	熊毛郡熊毛町大字安田	9	4.7	0.7	0.6		15号住居跡	後期後半	5
		10	4.5	0.5	0.6		26号住居跡	後期後半	5
		11	(4.8)	0.6	(0.8)		29号住居跡	後期前半	5
		12	5.0	0.5	未製品		30号住居跡		5
末武川流域									
宮原遺跡	下松市大字末武上字宮原	13	4.7	0.8	0.4～0.6		7号住居跡	後期後半	6
		14	4.6	0.6	0.4～0.7		7号住居跡	後期後半	6
円光寺遺跡	徳山市大字久米字円光寺	15	4.7	0.6	0.6		4号住居跡	後期前半	7
		16	4.6	0.8	0.4		4号土壙	後期前半	7
		17	(5.0)	0.5	(0.7)		1号住居跡	後期前半	7
佐波川流域									
右田・一丁田遺跡	防府市大字下右田	18	4.7	0.7	0.7～0.8	24	8号住居跡	後期後半	8
		19	4.1	0.6	0.5～0.7	20	14号住居跡	後期後半	8
		20	4.7	0.7	0.5～0.7	22	21号住居跡	後期後半	8
		21							8
下右田遺跡	防府市大字右田	22	4.6	0.8	0.8				9
		23	(5.5)	0.7	(0.6)				9
大崎遺跡	防府市大字大崎字東谷	24	4.9	0.5	1.0	17.4	5号住居跡	中期	10
		25	4.1	0.6	0.6	12.3	1号溝	中期中頃	10
		26	(4.6)	0.6			1号溝	中期中頃	10
井上山遺跡	防府市寿町	27	5.0	0.8	0.7	24	包含層		11
		28	(5.0)	0.6	0.7	20	9号住居跡	後期前半	11
		29	4.6	0.7	0.7	20	5号住居跡	後期後半	11
		30	5.5	0.5～0.6	0.6～0.8		表採		11
		31	(5.6)	0.6	0.6～0.8		表採		11
		32	6.0	0.5	未製品	21	表採		11
椹野川流域									
赤妻遺跡	山口市錦町	33	6.0	1.2	未製品		60号土壙		12
神郷大塚遺跡	山口市大字吉田	34	5.5～5.8	1.0	未製品	60.6			13
吉田遺跡	山口市大字吉田	35	(4.3)	0.8	(1.0)		2号住居跡	後期前半	14
		36	(4.9)	0.7					15
		37	4.85	0.8	未製品	23			15
		38	6.0	1.1	未製品	41.8	河川跡	奈良時代	16
		39	6.0	0.95	未製品	49.3			17
		40	5.3	0.65	0.6	31.4			
		41	4.9	0.75	0.6	31.0			
大内氏築山跡	山口市大字上竪小路	42	(4.4)	0.6	(0.6)		1号住居跡	後期後半	18
仏供田遺跡	山口市大字大内御堀字下仏供	43	(5.0)	0.75	(0.75)		49号土壙	中期後半	19
阿武川流域									
突抜遺跡	阿武郡阿東町大字地福上	44	5.0	0.7	0.6	22.7	11号土壙	前期末	20
		45	4.5	1.0	0.6	27	20号住居跡	中期	20
坂手沖尻遺跡	阿武郡阿東町大字徳佐上	46	5.0	0.8	0.7		3号溝	古墳後期	21
羽波遺跡	阿武郡阿東町大字徳佐下	47	3.3	0.7	0.4	10	2号住居跡	後期前半	22
		48	3.7	0.8	0.5	10.2	1号住居跡	後期前半	22
		49	(4.0)	0.8	(0.6)		8号住居跡	後期前半	22
		50	4.0	0.9	0.5	16.8	5号住居跡	後期前半	22
		51	(4.6)	0.4	(0.6)		8号住居跡	後期前半	22
		52	4.6	0.7	0.6	17.8	7号住居跡	後期前半	22
		53	(4.6)	0.8	(0.6)		2号住居跡	後期前半	22

Tab. 6　県内出土石製紡錘車一覧表

遺跡名	所在地	番号	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	材質	出土遺構	時期	文献
佐波川流域										
右田・一丁田遺跡	防府市大字下右田	54	6.1	0.9	0.7		?	攪乱層		8
		55	4.5	0.6～0.8	1.1		?	攪乱層		8
井上山遺跡	防府市寿町	56	5.0	0.4	0.6	20	黒色頁岩	表採		11
椹野川流域										
朝田墳墓群	山口市大字朝田	57	4.6	0.8	0.6		滑石	1号建物		23
小路遺跡	山口市大字黒川	58	(5.0)	0.6			砂岩	竪穴住居跡	前期前半	24
吉田遺跡	山口市大字吉田	59	4.7	0.7	0.7		?	河川跡	古代	25
		60	4.05	7.5	0.65	23.1	滑石			17
		61	5.4	0.8	0.75	35.2	滑石	1号土壙	後期後半	17
厚東川流域										
北迫遺跡	宇部市大字川上字蛎塚	62	3.8	1.2	0.8		滑石	1号住居跡	後期前半	26
神田遺跡	美祢郡美東町大字長田字神田	63	4.2	0.7	0.6	19.3	滑石	4号住居跡	後期	27
		64	4.3	1.0	0.6	36.2	閃緑岩	4号住居跡	後期	27
中村遺跡	美祢郡秋芳町大字別府中村	65	5.4	0.6	0.8		粘板岩	包含層		28
		66	(5.0)	0.6	(0.7)		安山岩	12号住居跡	中期前半	28
		67	3.7	0.5	0.6		粘板岩	4号住居跡	中期前半	28
厚狭川流域										
砂地岡遺跡	美祢市於福町下字砂地	68	(4.6)	1.2	(0.6)		滑石			29
		69	5.2	0.6	0.6		泥岩	15号住居跡	後期	29
栗遺跡	厚狭郡山陽町大字郡	70	4.6	0.8	0.7		頁岩	3号住居跡	中期	30
掛淵川流域										
荒人遺跡	大津郡油谷町大字久富字荒人	71	(3.9)	0.6	0.4		砂岩	2号住居跡	後期後半	31
木屋川流域										
下七見遺跡	豊浦郡菊川町大字七見	72		1.0			砂岩	25号土壙	前期末	32
		73	4.0	0.6	0.6		砂岩	3号住居跡		32
		74	6.0	1.1	未製品		砂岩	22号土壙	前期末	32
		75		0.7			泥岩	29号土壙		32
		76	2.9	0.8	0.3	8.5	泥岩	1号溝		33
		77	3.7	1.3	未製品	22.0	泥岩	105号土壙		33
		78	4.3	0.6	未製品	21.5	泥岩	2号住居跡	中期末	33
		79	4.9	0.5	0.45	19.5	泥岩	13号土壙	前期末	33
		80	3.5	0.8	未製品	12.1	泥岩	38号土壙	前期後半	33
		81	4.3	0.5	0.45	14.7	泥岩	9号住居跡	中期末	33
		82	6.0	1.6	未製品	68.0	泥岩	46号土壙		33
綾羅木川流域										
綾羅木遺跡	下関市大字綾羅木	83	(6.8)	0.6	0.6		粘板岩			34
		84	5.4	0.55	0.5	31.4	黒色頁岩			34
		85	4.5	0.7	0.4		粘板岩			35
石原遺跡	下関市大字石原	86					?			36

(2)　石製紡錘車

角閃石安山岩以外に山口県内で紡錘車に用いられる石材には、黒色頁岩・粘板岩・泥岩・滑石などがある。角閃石安山岩製紡錘車の分布範囲が山口県東部の周防であったのに対して、他石材を用いた紡錘車の分布範囲は、角閃石安山岩製紡錘車の分布範囲の西端を含みながらも山口県西部の長門にその中心がある。角閃石安山岩製紡錘車と他石材紡錘車は、その分布範囲を異にする。

時期的には前期から後期まで、全般的に用いられていたようである。このうち、滑石の利用は後期以降であり、中期には遡らない。特に滑石製紡錘車で注目すべきは、角閃石安

Tab. 7　県内出土土製紡錘車一覧表

遺跡名	所在地	番号	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	加工	出土遺構	時期	文献
松尾遺跡	熊毛郡平生町大字大野字松尾	87	(6.2)	0.9	0.8		A	1号住居跡	後期後半	37
島田川流域										
岡山遺跡	熊毛郡熊毛町大字安田字岡山	88	4.3	1.2	0.4	?	A			3
		89	3.3	0.5	0.7	6.0	B	環濠	中期後半	4
		90	4.8	0.6	0.8	16.8	B	環濠	中期後半	4
		91	5.0	1.5	0.8	35.8	A	63号土壙		4
追迫遺跡	熊毛郡熊毛町大字安田	92	3.2	2.3	0.4	?	A	39号住居跡	後期後半	5
		93	3.8	1.0	0.4	?	A	42号住居跡	中期	5
今井遺跡		94	4.8		0.6		A			38
椹野川流域										
赤妻遺跡	山口市錦町	95	9.1	1.2	未製品	?	B	73号土壙	前期末	12
		96	6.0	1.2	未製品	?	B	包含層	前期末	12
		97	4.0	1.2	未製品	?	B	60号土壙		12
小路遺跡	山口市大字黒川	98	3.4	0.7	0.3	9.3	B	竪穴住居跡	前期前半	24
		99	(4.3)	0.8			A	竪穴住居跡	前期前半	24
		100	4.1	0.6	未製品	9.9	B	竪穴住居跡	前期前半	24
吉田遺跡	山口市大字吉田	101	(5.7)	1.15		16.0	A			15
大内氏築山跡	山口市大字上竪小路	102	2.9	0.4	0.45	?	B			18
間田片川遺跡		103	4.3	2.2	0.6	34.5	A			39
畠田遺跡	山口市大字下小鯖	104	(4.0)	1.5			A	包含層		40
阿武川流域										
突抜遺跡	阿武郡阿東町大字地福上	105	5.5	0.6	未製品	?	B	1号溝	中期前半	20
惣の尻遺跡	阿武郡阿東町大字徳佐上	106	4.6	0.6	未製品	?	B	32号土壙	前期末	21
		107	4.3	1.0	未製品	?	B	32号土壙	前期末	21
		108	4.2	0.6	未製品	?	B	32号土壙	前期末	21
		109	4.4	0.9	未製品	?	B	32号土壙	前期末	21
		110	6.5	0.8	未製品	?	B	32号土壙	前期末	21
		111				?	A	32号土壙	前期末	21
木屋川流域										
下七見遺跡	豊浦郡菊川町大字七見	112	5.8	1.1	未製品		B	8号土壙	前期後半	32
		113	6.4	1.1	未製品		B	8号土壙	前期後半	32
		114	6.1	1.2	未製品		B	10号土壙	前期	32
		115	5.5	1.4	未製品		B	22号土壙	前期後半	32
		116	6.3	0.9	未製品		B	22号土壙	前期後半	32
		117	4.5	0.9	未製品		B	31号土壙	前期後半	32
		118	6.2	0.9	未製品		B	1号土壙	前期後半	32
		119	6.6	0.9	未製品		B	11号土壙	前期後半	32
		120	6.7	1.3	未製品		B	2号土壙	前期	32
		121	4.4	1.0	未製品		B	6号土壙	前期末	32
		122	4.7	1.1	未製品		B	33号土壙	前期	32
		123	4.2	1.2	未製品		B	20号土壙	前期	32
		124	3.6	0.9	未製品		B	4号土壙	前期	32
		125	4.6	0.9	未製品		B	1号土壙	前期	32
		126	4.5	0.9	未製品		B	1号土壙	前期	32
		127	2.6	0.9	未製品		B	29号土壙	前期後半	32
		128	3.6	0.9	未製品		B	29号土壙	前期後半	32
		129	3.7	0.6	未製品		B	173号土壙	前期後半	32
		130	5.1	1.0	未製品		B	99号土壙	前期末	32
		131	4.4	1.0	未製品		B	99号土壙	前期末	32
		132	4.1	1.3	未製品		B	14号土壙	前期後半	33
		133	3.8	1.2	0.4		A	98号土壙	前期後半	33
		134	4.5	1.3	0.5		A	202号土壙	中期前半	33
		135	3.1	0.9	未製品		B	14号土壙	前期後半	33
		136	5.8	0.9	未製品		B	34号土壙		33
山ノ口遺跡	豊浦郡菊川町大字古賀	137	3.6	1.2	0.5	?	A	1号溝		41
黒井川流域										
大門遺跡	豊浦郡豊浦町大字黒井	138	4.2	0.8	0.6	?	B	42号土壙	前期後半	42
		139	5.6	1.0	未製品	?	B	42号土壙	前期後半	42
		140	4.8	1.0	0.5	?	A	43号土壙	前期後半	42
		141	5.4	1.0	未製品	?	B	46号土壙	前期後半	42
		142	4.8	1.2	未製品	?	B	46号土壙	前期後半	42
		143	4.6	0.9		?	A	46号土壙	前期後半	42
		144	7.2	1.2	未製品	?	B	46号土壙	前期後半	42

沖田川流域										
下岡田遺跡	豊浦郡豊浦町大字室津上	145	4.2	1.7	0.7	?	A	包含層		43
宝蔵寺遺跡	豊浦郡豊浦町大字川棚	146	4.1	1.1	未製品	?	B			44
		147	4.4	0.9	未製品	?	B	土壙墓		44
綾羅木川流域										
綾羅木遺跡		148	4.2	1.65	0.38	?	A			34
		149	4.5	1.5	0.45	?	A			34
		150	4.1	1.4	0.5	?	A			34
		151	3.6	1.05	0.45	?	A			34
		152	3.75	1.13	0.23	?	A			34
		153	3.5	1.13	0.45	?	A			34
		154	4.65	0.9	未製品	?	B			34
		155	4.2	1.0	0.22	?	B			34
		156	3.0	1.05	0.38	?	B			34
		157	6.0	1.05	未製品	?	B			34
		158	5.9	0.8	未製品	?	B			34
		159	5.25	0.75	未製品	?	B			34
		160	3.4	0.75	未製品	?	B			34
		161	3.75	1.05	未製品	?	B			34
		162	4.05	0.9	未製品	?	B			34
		163	4.65	0.83	未製品	?	B			34
		164	4.8	1.05	未製品	?	B			34
		165	6.0	0.98	未製品	?	B			34
		166	3.4	0.6	0.5	?	B			45
		167	4.5	0.75	未製品	?	B			45
岩谷古墳		168	7.1	2.8	0.4		A			46

山岩製紡錘車の分布範囲の西端である椹野川流域での出現時期である。吉田遺跡から後期後半の遺構に伴って滑石製の紡錘車が出土している。弥生紡錘車そのものの解体期である後期後半に、角閃石製紡錘車が流通した地域の一角に滑石製紡錘車が食い込んでいるのである。これは、それまでの角閃石安山岩製紡錘車が流通していたシステムの崩壊を意味するものであろうか。

(3) 土製紡錘車

土製紡錘車は、山口県全域で出土している。時期も、前期から後期の全般にわたるようである。しかし、山口県西部での前期弥生遺跡の調査例が多いためか、県西部と前期に数量的な偏りが見られる。特に、県西部の土製紡錘車は土器片再利用のB種が目立つ。

角閃石安山岩製紡錘車の分布範囲である山口県東部の土製紡錘車には、以下のような傾向が見られる。角閃石安山岩製紡錘車の分布範囲において土製紡錘車が出土する地域は、島田川流域と椹野川流域のみである。このうち、椹野川流域で時期が判明する土製紡錘車はB種が大半で、いずれも前期の特徴をもち角閃石安山岩製紡錘車が普及する以前のものである。角閃石安山岩が流通し始めると、B種土製紡錘車は姿を消したと考えられる。

島田川流域の土製紡錘車は、中期から後期のものであるが、数量的には限られている。また、椹野川流域の前期紡錘車がB種を主体としていたのに対して、島田川のものはA種が主体である。

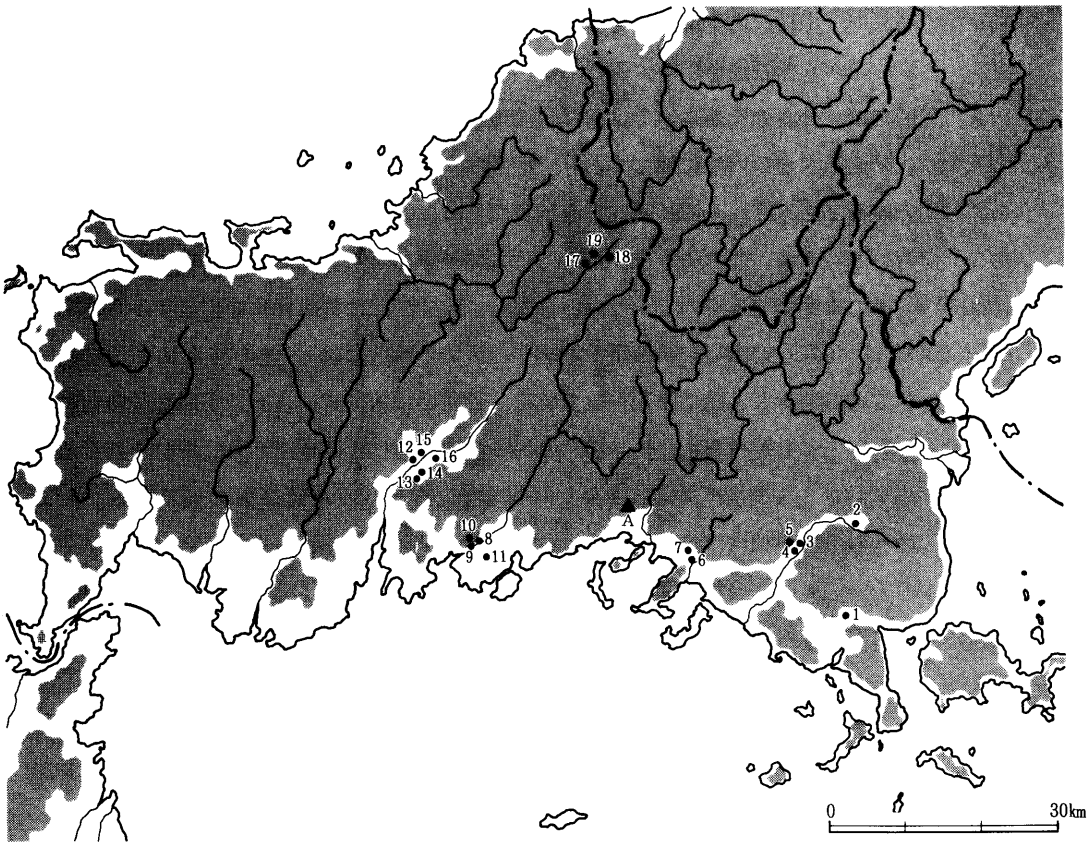

Fig. 93　山口県内における角閃石安山岩製紡錘車の分布図

A．四熊ヶ岳	5．追迫	10．大崎	15．大内氏築山跡
1．明地	6．宮原	11．井上山	16．仏供田
2．清水	7．円光寺	12．赤妻	17．突抜
3．天王	8．右田一丁田	13．神郷大塚	18．坂手沖尻
4．岡山	9．下右田	14．吉田	19．羽波

2　角閃石安山岩製紡錘車の流通

角閃石安山岩製紡錘車は、裸眼観察でも容易に識別しうる特徴を有している。第1章の集成により、他の材質の紡錘車とは排他的に弥生時代中期後半から後期後半まで山口県東部の周防の地域で流通していることが明かとなった。この限られた分布範囲に石材の採石地があろうことは想像に難くない。地質学の見地[9]からすれば一口に角閃石安山岩といっても、山口県内の産出地は青野山火山群と阿武単成火山群の2つに分かれるとのことである。このうち、弥生遺跡から出土する紡錘車に用いられる角閃石安山岩には、角閃石の斑晶が長柱状を呈する特徴があり、阿武単成火山群のものは除外され、青野山火山群の産出物と限定することが可能とされる。しかし、青野山火山群は、島根県青野山から山口県四

熊ヶ岳を結んで、山口県内を南北に縦断するように分布している。今のところ、青野山火山群から更に細かく採石地を限定することは、多くの資料分析が必要であるという[10]。

考古学的には、分布の面からいえば阿武川流域を除いて、角閃石安山岩製紡錘車を出土するいずれの水系も瀬戸内海に面しており、瀬戸内海に最も近い新南陽市四熊ヶ岳が有力な採石地の候補であろう。一方、阿武川流域に関しては、県境にある青野山火山群の野坂山などが近いといえる。このように、弥生時代の紡錘車に用いられた角閃石安山岩の採石地は一つの山に限定できるものではない。しかし、時期的には弥生時代中期後半から後期後半に限られ、角閃石安山岩製紡錘車が流通した周防の地域では 、他の材質による紡錘車がきわめて希であることには注意が促される。周防の地域内で何らかの規制が働いた可能性は大きい。先にも述べたように、山口県内の集落立地には特徴があり、閉鎖された地域内で水系をおさえる大規模集落と周辺の中小規模集落といった構成をとっている。この場合、個々の集落が独自に角閃石安山岩を求めたとは考え難く、大規模集落が入手して各地域内で分配していた公算が強い。それならば、角閃石安山岩はそれぞれ水系の大規模集落が独自に求めたのか、それとも採石地に角閃石安山岩を配布し交易する集団が存在したのか、といった疑問が生じる。

現在のところ、有力な採石地と推定される四熊ヶ岳周辺には顕著な弥生遺跡が見あたらないが、見あたらないから遺跡が存在しなかったと断言するには躊躇がある。供給源となる遺跡が限定できない場合、各々の集落における角閃石安山岩の搬入状態によって、その有無を考える方法がある。原材のまま搬入されているのか、ある程度まで加工されているのか、それとも完全な製品として搬入されているのかを、検討するのである。加工を受けて搬入されていたのならば、供給し交易する集団が存在した可能性は強いといえよう。それを判断していく実務的な作業は、角閃石安山岩の原材、加工剥片、あるいは未製品の各遺跡における出土の把握を必要とする。現在のところ、これらの報告例は極めて少ない。しかし、これを無批判にうけとってよいかは疑問である。まず角閃石安山岩の性質を知る為に、角閃石安山岩の入手から始まる紡錘車製作の実験を行った。

(2) 紡錘車製作実験

石材の入手手段を考えた場合、火山岩ならばその供給源である火山そのものに目が向いてしまいがちである。小田村宏氏は中世墳墓群である山口市瑠璃光寺遺跡[11]から出土した角閃石安山岩製石塔の産出地を四熊ヶ岳に求め、四熊ヶ岳南西稜の7～8合目付近から頂上にかけての母岩の露出と切り出しのクサビ目を報告している。確かに、今回の踏査でも四熊ヶ岳では山中に角閃石安山岩の母岩にクサビ跡を確認することができた。現在でも四熊ヶ岳周辺では、角閃石安山岩を用いて製作された江戸時代の石造物を確認することができる。

少なくとも、四熊ヶ岳の角閃石安山岩の露頭は近世には石切り場となっていたのだろう。ところが、四熊ヶ岳に登らずとも、平坦地での角閃石安山岩の入手は可能である。四熊ヶ岳の裾を流れる神代川は角閃石安山岩を下流へと運び、富田川との合流点では多量の角閃石安山岩を採集することが可能である。それらはいずれも偏平な川原石である。椹野川流域の赤妻遺跡や神郷大塚遺跡から出土した未製品もまた、角閃石安山岩の偏平な川原石であった。遺跡での石材の状態は、弥生時代における角閃石安山岩の利用が、切り出すのではなく、川原石の採集を示すものといえる。

紡錘車の製作実験は神代川で採集した、手ごろな石材でおこなった。側縁荒割りの未製品が吉田遺跡から出土していることもあり、まず側縁の荒割りを行った。角閃石安山岩は極めて軟質で、打撃を加えると剥離するのではなく打点部分が粉砕した。粉々になった石屑は雨に溶けてしまい、発掘による検出がほぼ不可能であることを示した。

次に、研磨による整形はコンクリートのたたきにこすりつけて行った。実験考古学にコンクリートを用いたことに反対する声もあろうが、今回求めているのは加工時における角閃石安山岩の特性であって、完全な製作工程復原ではない。自然界には、コンクリート以上の硬度をもった石材はいくらでもあるわけである。全てをその通りに復原するのではなく、目的に応じて代替物を使用することは許されよう。角閃石安山岩は荒割りの時点でも明らかなようにきわめて軟質であり、研磨による加工もたやすいものであった。荒割りからわずか30分で、紡錘車としての形は整った。

紡錘車の製作過程において、角閃石安山岩の特性が明かとなった。荒割の段階で出る石屑は、発掘による検出がほぼ不可能なこと。荒割からの加工にはほとんど手間がかからず、すぐに紡錘車の形が整ってしまうことである。

(3) 角閃石安山岩製紡錘車の意義

既往の発掘データーからは、角閃石安山岩を供給し交易する集団の有無を判断することは事実上不可能である。ただし、椹野川流域から川原石の原材が出土していることを考えるならば、原材で各集落に搬入されていた可能性は強い。とすれば、供給集団が介在した可能性は低くなるのであろうか。筆者はそうではなく、周防の広い地域で角閃石安山岩が、紡錘車以外の用材にはほとんど用いられなかった事実に着目すべきと考える。各水系毎に独自に角閃石安山岩を入手したのであれば、紡錘車以外の石器が製作され、その用途にバラツキが見られるのではないだろうか。供給する集団が、あらかじめ紡錘車製作に手ごろな大きさの石材を選別し、搬出するがゆえに角閃石安山岩の用途は規定されるのではない

か。

石庖丁や太形蛤刃石斧のように使用すれば消耗する利器ではなく、石材が特殊であり目につきやすい角閃石安山岩製紡錘車で、ここまで議論することに危険性がないわけではない。確かに、過大評価は慎まねばならない。しかし、過小評価にとどまってはならない。何の変哲もない紡錘車が広く分布することは、石材の特殊性による判別のしやすさを差し引いたとしても異常な状態である。特殊な石材による太型蛤刃石斧や石庖丁などは時として、製作上の効率や製品としての性能の優位性から、産出地を遠くはなれた広域分布の説明が行われる[12]。しかし、紡錘車には改良の余地はなく、実際に角閃石安山岩製であろうがなかろうが単なる円形である。効率に関しても土器片を再利用した方が、原材を他所に求める必要もなく、加工も角閃石安山岩と同程度の労力であろう。ならば、弥生前期には各集落が独自に行っていた土器片再利用の技術を捨ててまで、角閃石安山岩製紡錘車に移り変わる必然性は性能や効率の面からは認められなくなる。この点からしても、もはや各地域の大規模集落が独自でわざわざ角閃石安山岩を入手していたとは考え難い。供給集団を介在させた広域流通システムの存在なしには、おおよそ説明のつかない現象であろう。ここに、四熊ヶ岳を中心して海上交通を利用する角閃石安山岩供給集団が介在していたことを認めたい。

これらが、政治的要因によるものか、自然発生的な弥生社会体制維持の必要性に応じたものかは明かではない。しかし、この角閃石安山岩製紡錘車が流通した範囲こそ、周防中期弥生社会に独自の垂下口縁壺の分布範囲であり、土版型分銅形土製品の分布範囲に一致するのである。これらは、隣接する他地域と比較しても、極めて独自性の強い遺物である。弥生中期における周防地域の水系単位を超えた、瀬戸内海を通しての集落間の結合を示す例証といえよう。この周防弥生中期社会における生活の基本単位である衣食住の衣を担っていたのが角閃石安山岩製紡錘車なのである。けれども、所詮は紡錘車である。周防弥生中期集落システムに組み込まれている限り、交易による供給集団の飛躍発展は得られなかったのである。日本全国的に紡錘車は、古墳時代の開始に前後して一旦その姿を消す。この周防の地域もまた例外ではない。その傾向は弥生時代後期後半に強くなり、角閃石安山岩製紡錘車が流通する西端の椹野川流域に滑石製紡錘車（円板形）の流入が見られ、弥生中期流通システムの解体がうかがえる。社会体制が大きく変動していくなか、角閃石安山岩の供給集団はいかなる運命を迎えたのであろうか。

おわりに

四熊ヶ岳山頂に立ち、眼下の瀬戸内を望めば、直線距離にして5㎞先の海上には現在は工場の埋め立てによって地続きとなった竹島が見える。この竹島の最高所に位置する前方後円墳こそ、「古い相の鏡群」をもった御家老屋敷古墳なのである。この竹島御家老屋敷古墳の主体部である竪穴式石室に用いられていた石材は角閃石安山岩である[13]。竹島御家老屋敷古墳を築いた集団は、角閃石安山岩の利用法を知っていたといえる。

西部瀬戸内の小島に突如として出現した発生期の前方後円墳は、大和政権が大陸交渉のために把握した海上交通の証として説明されるが、なぜ竹島の地に出現したかの必然性を説明してはいない。周辺には該当時期の集落の存在すら明確でない小島である。むしろ、当時の山口県内では、古柳井水道をおさえた田布施の地域に、明地遺跡などに代表される大規模集落が控えていた。石走山方形台状墓[14]から国森古墳[15]はまさしく弥生からの在地首長墓の系譜を示すものであろう。国森古墳に副葬された連弧文昭明鏡は、周防弥生社会が入手しえた最高の品であり、それを保有しえた古柳井水道を中心とする集団への力の集中が窺える。ところが、竹島に前方後円墳が築かれた古墳時代に至っては、古柳井水道を中心とする集団が築いた国森古墳は在地色の強い方墳であり、それまでの弥生社会を飛躍するものではなかった。それではなぜ、集落の存在すら明確ではない竹島の地に前方後円墳は築かれたのか。筆者はその必然性は、古墳時代開始間際まで流通しつづけた角閃石安山岩製紡錘車にあると考える。

周防の地域で弥生時代終末まで流通した角閃石安山岩製紡錘車と、その産出地の近くに築かれた古墳出現期の前方後円墳の主体部が同じ角閃石安山岩であることは単なる偶然とは言えまい。おそらく、四熊ヶ岳の供給集団が角閃石安山岩の供給を通して蓄積された西部瀬戸内海における海上交通のノウハウは、大陸交渉を重大な政策とする大和政権にはなくてはならないものであったはずである。また、弥生後期に至り周防の中期弥生社会システムが解体し、角閃石安山岩の需要が低下するなかで、その供給集団は強力な後ろだてなくして存続し得なかったのである。そして、大和政権は周防弥生社会におけるそれまでの有力勢力とは結び付かず、その一歯車である角閃石安山岩の供給集団と結び付くことによって旧社会にクサビを打ち込んだのであろう。かくして、角閃石安山岩供給集団は大和政権傘下の証しである前方後円墳を築き、それまでの周防弥生社会から飛躍発展することができたのである。

最後に我田引水になりかねないが、角閃石安山岩が流通していた周防地域の弥生時代中

期後半を代表する垂下口縁壷が、奇しくも竹島後家老屋敷古墳と同じ「古い相の鏡群」をもつ大分県赤塚古墳に近接する野口遺跡[16]から出土している。竹島御家老屋敷古墳と赤塚古墳をつなぐ海上ルートは、既に弥生中期の段階で成立していた公算が強い。とすれば、周防中期弥生社会が交易によって築いた海上航路を、大和政権がそのまま取り込んだとする考えもあながち的はずれではあるまい。角閃石安山岩製紡錘車や垂下口縁壺などの地方特色の出る遺物に目を向け、その移動に注意することは周防弥生社会を研究していくうえで必要不可欠である。

引用文献

1．山口県教育委員会『明地遺跡』(1993年)

2．山口県教育委員会『清水遺跡』(1989年)

3．山口大学島田川遺跡学術調査団『島田川』(1953年)

4．山口県教育委員会『岡山遺跡』(1987年)

5．山口県教育委員会『追迫遺跡』(1988年)

6．山口県教育委員会『宮原遺跡・上広石遺跡』(1973年)

7．山口県教育委員会『円光寺遺跡』(1987年)

8．山口県教育委員会『防府市右田･一丁田遺跡・徳山市的場･宮ノ馬場遺跡・徳山市久米市遺跡』(1973年)

9．山口県教育委員会『下右田遺跡第3次調査概報』(1979年)

10. 山口県教育委員会『南国大崎ニュータウン奥正権寺遺跡・大崎岡古墳群・山崎遺跡』(1985年)

11. 井上山遺跡発掘調査団『井上山』(1979年)

12. 山口県教育委員会『赤妻遺跡』Ⅱ (1993年)

13. 山口市教育委員会『神郷大塚遺跡』(1991年)

14. 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』(1982年)

15. 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅴ (1986年)

16. 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅵ (1987年)

17. 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅷ (1990年)

18. 山口市教育委員会『大内氏築山跡』Ⅳ (1990年)

19. 山口県教育委員会『仏供田遺跡』(1993年)

20. 山口県教育委員会『突抜・馬場遺跡』(1985年)

21. 山口県教育委員会『坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡』(1978年)

22. 山口県教育委員会『羽波遺跡・片山遺跡』(1989年)

23. 山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳』(1977年)

24. 山口市教育委員会『小路遺跡』(1988年)

25. 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅱ(1985年)

26. 宇部市域遺跡群学術調査研究報告『宇部の遺跡』(1968年)

27. 山口県教育委員会『神田遺跡』(1990年)

28. 山口県教育委員会『中村遺跡』(1987年)

29. 山口県教育委員会『砂地岡遺跡』(1993年)

30. 山口県教育委員会『妙徳寺山古墳・妙徳寺山経塚・栗遺跡』(1991年)

31. 山口県教育委員会『荒人遺跡・稲石遺跡』(1990年)

32. 菊川町教育委員会『下七見遺跡』Ⅰ(1989年)

33. 菊川町教育委員会『下七見遺跡』Ⅱ(1992年)

34. 下関市教育委員会『綾羅木遺跡発掘調査報告』第Ⅰ集(1981年)

35. 山口県教育委員会『綾羅木郷台地遺跡(明神地区)』(1988年)

36. 山口県教育委員会『下関市塚本古墳・秋根遺跡・石原古墳』(1974年)

37. 山口大学人文学部考古学研究室『西部瀬戸内における弥生文化の研究』(1984年)

38. 山口県教育委員会『今井遺跡』(1979年)

39. 山口市教育委員会『問田片川遺跡』(1985年)

40. 山口県教育委員会『畠田遺跡』(1992年)

41. 山口県教育委員会『山ノ口遺跡』(1991年)

42. 山口県教育委員会『大門遺跡』(1991年)

43. 山口県教育委員会『下岡田遺跡』(1989年)

44. 豊浦町教育委員会『宝蔵寺遺跡』(1993年)

45. 山口県教育委員会『綾羅木郷台地遺跡－明神地区・久保之上田地区－』(1989年)

46. 山口県教育委員会『下関市岩谷古墳発掘調査報告』(1972年)

〔注〕

1)藤村淳子「紡錘車」(『弥生文化の研究』5、1985年)

2)東大阪市の鬼虎川遺跡遺跡からは、木製の軸を装着した状態の石製紡錘車が出土している。

芋本隆裕「紡織具・雑具」(『鬼虎川の木質遺物』東大阪市文化財協会、1987年)

3）山口県内から鉄製紡錘車が数点出土しているが、いずれも中世のものと考えられる。

山口県教育委員会『桜畠遺跡』(1991年)

山口県教育委員会『土井ヶ浜南遺跡』(1992年)

山口県教育委員会『仏供田遺跡』(1993年)

4）他府県の出土例より、木製・骨角製の紡錘車の存在が想定される。

5）弥生時代の土製截頭円錐形紡錘車の出土例は、板付遺跡1区70号竪穴に出土例がある。

中間研志「紡錘車の研究－我国稲作農耕文化の一要因としての紡織技術の展開について－」(『石崎曲り田遺跡』Ⅲ　福岡県教育委員会、1985年)

6）佐原眞「紡錘車」(『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会、1964年)

7）山口県内弥生遺跡を水系単位で把握する方法は、既に小野忠凞氏や河村吉行氏らが行っている。

小野忠凞『山口県の考古学』1985年

河村吉行「考察－弥生時代竪穴住居跡の各属性について－」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅴ、1986年)

8）河村吉行「周防と長門の弥生時代」(『山口県史研究』第2号、1994年)

9）永尾隆志「山口県の火山をたずねて－青野山火山群、阿武単成火山群－」(『山口地学会誌』第28号、1992年)

10）永尾隆志氏の御教示による。

11）小田村宏「石塔に関する問題」(『瑠璃光寺遺跡』山口市教育委員会、1988年)

12）下條信行「北九州における弥生時代の石器生産」(『考古学研究』第22巻第1号、1975年)

13）西田守夫「竹島御家老屋敷古墳出土の正始元年三角縁階段式神獣鏡と三面の鏡」(『MUSEUM』No,357 東京国立博物館、1980年)

14）山口県教育委員会『石走山遺跡』(1993年)

15）乗安和二三『国森古墳』(田布施町教育委員会、1988年)

16）小倉正五「野口遺跡・樋尻道遺跡」(『宇佐地区圃場整備関係発掘調査概報』宇佐市教育委員会、1981年)